
迷宮のストラテジー 2

堂餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮のストラテジー 2

【Zコード】

Z6104E

【作者名】

堂餓鬼

【あらすじ】

また、妙な事件に巻き込まれてしまつ真治。なんと、事件の現場は、真治が住んでいるマンションだった。不可解なトリックを使つた密室事件を真治は、解決する事が出来るのか？

第2話・自殺？他殺？不可解な

密室殺人事件

春の太陽が、暖かく照りつける。俺は、大学敷地内のベンチに腰を下ろして、物思いに耽っている。

あの事件が起きてから、約1週間が経っていた。彼女は今、何をしているだろう？

元気にしているだろうか？彼女の涙を思い出し、胸を締め付けられる。

そういうえば最近、あの喫茶店にも行つてないな・・・。彼女の顔を見に寄つてみるのも、悪くはない。そんな事を考えながら、ボーッとしていると不意に、後ろから声を、掛けられた。

驚いた俺は、1瞬遅れて後ろを振り向いた。そこには、見慣れた顔があつた。祐輔だ。「よつ！何辛氣臭い顔してんだよ。」祐輔は何時もの調子で言った。「お前は、能天氣で、ホントにいいねえ！」俺は、冷やかしのつもりで言つたが、祐輔は気付かないらしく、「そういうやさ！」と話の話題を変えた。

「今日の新聞見たぜ」

「新聞？」「何だ？知らないのか？」

「何か、面白い記事でも載つてたか？」

「俺としては、面白いかな」と言つて変な笑みを溢しながら、俺に新聞を渡してきた。

その新聞の見出しひには、こう書かれてあつた。1週間前に起きた、偽造誘拐事件を見事解決！平成のシャーロックホームズ誕生か！といつ見出しだつた。写真まである。

いつの間に撮つたことやら・・・新聞を見終わつたと思ったのか、すかさず祐輔が、口を挟む。

「すげえ～じやん。大学生で事件解決するなんて」

「そうか？」「そうだよ。大学の中じゃ評判になつてゐるぜ。先生だつて、浮かれてるんだからな。」

「どうせ、大学の事しか考えてないよ。あの入達は……」

そんな会話が続いていたが、大学のチャイムが、鳴り響いた。「おつといけねえ、授業が始まつちまつ。行くぞ」

「おう」俺は返事をして、ベンチから腰を上げて、その場を離れた。教室に着いた俺たちは、自分の席に着いた。先生が入つてくるなり話始めた。

その内容は、今日このクラスに転校生が、来るというものだつた。
「少し遅れたが、転校生を紹介する。入りなさい。」そう言つと、1人の少女が、教室に入つて來た。入つてきた女の子の名前は、【藤咲葵】という名前だ。クラスの皆は、おおはしゃぎ……殆どはしゃいでいるのが、男なのだが……先生が一通り説明し終わつた後に、彼女に自己紹介するように促した。

彼女は、一呼吸置いた後に、喋りだした。

「初めまして、【藤咲葵】つていいます。皆と馴染めるか分からな
いけど、仲良くなれるように努力するから、これから宜しくね。」
そう言って、彼女の自己紹介は、終了した。そして昼休み、彼女の
席の周りには、男を中心として、集まっている。色々質問されてい
るみたいだ。『既にクラスに馴染んでるし……』そう思つた。
大学が終わり、俺はそのまま、行き付けの喫茶店に、顔を出した。
席に着いて、直ぐに彼女を探した。

やはり、あの事件の時のショックが大きすぎて、バイトまで辞めて
しまつたのだろうか？

諦めかけたその時、元気の良い声が、聞こえた。『何処かで、聞い
た事のある声だ。』そう思つて、声がした方に目を向けた。『居た。
『彼女が、元気良く接客をしていく最中だつた。『良かつた、元気
みたいだ。』俺の視線に気付き、彼女は

『あつ』と声をあげ、俺の元に駆け足で、近寄ってきた。最初に言
葉を発したのは、【美紀】だつた。

『久しぶりだね』いつもの笑顔だ。俺も笑顔で、
『久しぶり』と答えた。

「あの事件、解決してくれて、ありがとう」

「いいよ。そんな事は・・・でも、俺が事件を解決するとは、思わなかつたな」

「ええ～っ自信満々で、俺に任せとけって言つたのは、何処の誰だつけ？」

「俺、そんな事言つたっけ？」

「あ～、また惚けちゃつて～」彼女は、腹を抱えて笑っていた。
元気になつて、ホント良かつた。そういう話をしていた時に、喫茶店に1人の女の子が、入ってきた。

その女の子と「のは、今日大学に転校して来た女の子・・・【藤咲葵】だつた。【藤咲】は俺の姿に気付き、駆け足で近寄つてきた。

「大学に居た人だよね？」

いきなり妙な質問をする。

「大学に居るつて言つか、生徒なんだけど・・・」

すると今度は、【美紀】が口を挟む。「誰？」

「俺が通つてる大学の生徒だよ。今日、転校してきたんだ。」

「へえ～、そうなんだ。」

「初めまして、【藤咲葵】つて言います。宜しくね」

「こちらこそ、宜しく」2人は既に、打ち解けている。さすが、女の子・・・。

話もそこそこに俺は、家に帰つた。1つ不思議なのは、何故か【藤咲】が、俺の後についているということ・・・

「何で着いてくんの？」

「へ？ だつて私、このマンションに住んでるから」 そう言つて、

彼女が指差した方を向いた。俺は、驚いた。

彼女が住んでいるというマンションは、俺が住んでいる場所だからだ。しかも部屋も、隣同士だ・・・。『マジかよ』俺は、心の中でそう思つた。翌日、マンションが妙に騒がしかつた。俺は外に出で、様子を伺つた。

警察が忙しなく、動き回つてゐる。何事かと思つた俺は、近くに居

た人に、聞いてみた。

「何かあつたんすか？」

「この部屋の人が、自殺したみたいよ」そう言つと、部屋の方を指差した。

俺は部屋の中を、覗いてみた。やはり、オッサンも居る。

「確かに、自殺みたいだな」後ろから視線を感じた俺は、振り向いた。【藤咲】が立っていた。俺は驚いて、扉に頭をぶつけてしまった。

その音に、警官全員が振り向いた。勿論、オッサンも・・・

「何があつたの？」藤咲が、声を、発した。

「事件だろ？俺には、関係ないけど・・・」そう言つてその場から、立ち去りうとした俺の襟を、オッサンが掴んで現場に、引きずつていいく。

「は、離せよ」俺は無駄だと思ったが、それでも、些細な抵抗を試みた。

「お前にも事件に協力してもらひうぞ」やはり、抵抗は無駄だった。・・・。

「何で一般人を事件に巻き込む？」　　「何が一般人だ。以前、誘拐事件を解決したじやないか」　　「あれは訳があつたから、仕方なく事件を解決したんだよ。今回の事件は、関係ないだろ」そう言ったものの、オッサンも引かなかつた。

結局、事件に協力する事になつてしまつた。気付いたら、藤咲が、隣に居た。

「誰だ？この子」

「俺の知り合い」説明するのが面倒臭かつた俺は、適当に言つた。するとやはり、オッサンが冷やかしてきた。

「何だ、前の彼女から乗り換えたのか？」俺の隣に居た藤咲が、剥きになつて聞いてきた。

「前の彼女って誰なの？」

「何だ、お前まで・・・別にあの子は彼女でも何でもないよ

「ホントか～？」 「ホントなの～？」 2人が同時に喋った。こいつらは・・・。俺は、溜め息を、吐いた。早速俺は、事件の状況をオッサンから聞いた。

「で、どんな状況？」

「亡くなっているのは、小説家の【長谷川友造】年齢は58歳死因は頸動脈圧迫による窒息死。首を吊つて亡くなっているのを管理人が発見し、警察に通報した。」

「じゃあ～自殺なんじゃないんすか？」

「少しばら眞面目に考える」

「別に、好きで事件に首を突っ込んでる訳じゃないし・・・」

すると、隣に居た藤咲が、口を挟んできた。

「ねえ～ホントに自殺なのかな？」 「はあ～？ 現に首吊つて、亡くなつてたんだぜ？ それのドコが自殺じやないんだよ？」

「それは解らないけど・・・」 藤咲は、困ったように俯いてしまった。

ちょっとと言い過ぎたかと思つた俺は、謝りひとした・・・が、ある事に気付いた。

俺は、床に座り込んで、あるものを見ていた。カーペットに付いたシミだ。それを見た瞬間、電流が走った。

もしかしたら・・・

「藤咲」呼ばれた【藤崎】は、キヨトンとした顔で俺を見た。

「もしかするとお前の推理、当たつているかもしれないぜ」

現場に居る全員がざわついた。「お、おいおい。さつきお前自信が自殺だつて言つたじやないか」「考えが変つたんだよ」こいつ、シレツとした態度で言いやがつて。

「それにもう一つ気になる事があるんだ」

「気になる事？」 藤咲が、口を開いて言つた。

「ああ、さつきこの部屋に入った時から気になつてたんだけど、部屋の温度が異常に高いんだ」 「そう言えばそうだな」

「で、さつき調べたんだけど、タイマーで、セットされているみた

いなんだ。今は、暖房のスイッチが切れてるみたいだけだ

「じゃあ、何らかのトリックがあるという事か」

「まつ、そう言う事。恐らくは、殺人だろうな」

「でも一体誰が、【長谷川】さんを殺したんだ。」「それを捜すのが、刑事であるオッサンの役目だろ?」

「くつ、こいつは・・・」袴田は拳を握り締めたが、振り上げる事はしなかった。

コイツには、事件を解決する力があるからな・・・事件が解決したら、思いつきりぶん殴つてやる。俺は、現場を歩き回った。何か他に気になる事が、あると思ったからだ。

だが、他に気になる事が、見付からない・・・俺は途方に、暮れていた。

その時俺はふと気になり、オッサンに聞いた。

「なあ オッサン」

「何だ?」「この部屋の入り口はどうだった?」

「ん? 入り口?」

「密室だつたかって聞いてんだよ。」「だつたらそいつと言え」

「文句ばかり言つてないで、実際はどうなんだよ?」

「管理人が発見した時は、ドアには鍵が掛かっていたと証言している。」

「成る程・・・じゃあやつぱり、この事件は、密室殺人か」

「そうなると、益々解らなくなる。一体犯人は、殺害した後はどうやってこの部屋から、出でいったんだ?」考えてはみたものの、袴田の頭では限界がある。次第に袴田自身も頭が、混乱してきたようだ。

藤森は、冷静になり、言葉を発した。「この部屋に入ったのは?」聞かれた袴田は、直ぐには反応出来なかつた。

「聞いてんの? オッサン」

「へ? な、何だ」

「やっぱり聞いてなかつた。だから、この部屋に入った人物は、管

理人の他に誰がいるんだよ? 「ああ、その事か。それはまだ捜査中だ。」

「たつく、仕事が遅いのは、何時もの事か?」

『くつ、またコイツは余計な事を……』 そう思つたが、言葉には出さなかつた。オッサンが言つには、死亡推定時刻は昼の12時32分という事だ。・・・と言つ事は、殺されたのは、それ以前の時刻という事になる。

俺はコメカミを左手の指で押さえ、もう一度事件を整理してみた。「被害者を発見したのは、このマンションの管理人。扉には鍵が掛かっており、部屋はすごく暑かつた。被害者が吊るされていた下の床には、何かを溢したようなシミが付いていた。何らからのトリックを使って、犯人は密室を作り出し被害者を殺害した。」 そのトリックとは一体・・・。俺が考えを巡らせてる時に、警官が1人と眼鏡を掛けた男性と、髪を後ろで結んでいる長身の男が2人入ってきた。

2人共編集社の社員という事だ。オッサンが2人に近づき、話を聞いている。2人の話によると、先に【長谷川】さんと会っていたのは眼鏡を掛けた男性、その次に髪を後ろで結んでいる長身の男性。マンションに言つた理由は、1人は小説の〆切が今日だつた為原稿を受け取りに来たとの事。長身の男性は、【長谷川】さんに借金をしていたが、お金の用意が間に合わなかつた為に、もう少し待つてくれるよう頼みに行つたとの事だつた。

一通り話を聞いた袴田は、2人に聞いた。先ずは、眼鏡を掛けた男性。

「原稿を取りに行つたのは、何時の事ですか?」

「確かに・・・10時56分位だと思いますけど」

「小説の〆切に間に合つたんですか?」

「それが・・・色々と御託を並べて、結局間に合わなかつたんです。」

「何時も【長谷川】さんは、〆切を守らないんですか?」

「昔はそんな事は無かつたんですが……小説が売れ出した途端に、一切の期日を守らなくなつて……」

「成る程。そうですか、有り難う御座います。じゃあ、次は貴方」

袴田はそう言つと、長身の男性の方を見た。

「貴方は何時頃にこのマンションに来たんですか？」

「俺は、11時24分位にここに來たけど」

「借金の返済が間に合わず、もう少し待つてくれと頼みに來た……そういう事ですね？」袴田は、もう一度聞いた。

「そうです。」袴田はもう一度彼らにお礼を言つて、真治に近付いて来て小言で俺に話しかけてきた。

「で、何か解つたか？」

「直ぐに解る訳ないだろ？」「う

俺は、オッサンに冷たい視線を投げ掛けた。重苦しい空気が漂つている現場から、逃げるようにして外に出た。空気を大きく、口を開けて吸い込む。もう一度俺は、事件について考えてみた。

「容疑者は2人、共に動機はあり、アリバイもない。だとしたら、この2人の内どちらかが犯人という事になる。でも……肝心のトリックが解けない」犯人は、どうやつて【長谷川】さんを殺害し、密室を造り出したというのか……？ カーペットに付いたシミ、暑すぎる部屋……。待てよ、

「もしかしたら」真治はそう呟き、また現場に戻つていった。

俺は殺害現場の中央に立ち、眉間に左手の指を添えて考えた。考えた瞬間閃いた。

『そういう事が……これで2つの謎が解けた。』だが、最大の難問が残っている……。そう。それは、密室という謎だった。真治は現場の中を動き回つた。

「おい、何やつてんだ？」オッサンから声を掛けられたが、聞こえないフリをして、捜した。『見つけた』そう。俺が捜していたのは、この部屋の鍵だった。タンスに入つている。

『この鍵を使ってドアの鍵を締め、また同じ場所に戻すのは、不可

能だな。』『どうやつて密室を造り出した・・・』そう考えた時に、1つの可能性を見出だした。それは・・・管理人が犯人という説だつた。管理人が犯人ならば、鍵を締める事も簡単に出来る。だがそれには1つ問題がある。管理人には、アリバイがあるという事だ。それを崩さない限り、管理人を犯人と断言するのは難しい。

そのアリバイというのは、【長谷川】さんが殺害された時刻、管理人は美容院に行っていたと言つ。確認も既に、取れている。そう考え諦めかけたその時、俺が、考えたトリックとアリバイが一致した。・・。

あの方を使えば、その場に居なくとも、犯行は可能だ。全てのパズルのピースが今、1つになつた。

謎を解いた俺は、現場に居る皆を周りに集めた。勿論、容疑者である2人と管理人も・・・皆を俺の周りに集めた矢先、オッサンが口を開いた。

「おいおい、皆を集めて何しようってんだ？」

「何言ってんだよ。これから、皆に事件の真相を話すんじゃないか。そもそも、一番真相を知りたがっていたのは、紛れもない。オッサンだろ」

「な、何？解ったのか・・・犯人が」「解らなかつたら皆を集めたりなんかしないよ」

そう言つて俺は、一息置いた後に、皆の顔を見回して、真相を口にした。「今回起きた事件は、時間差トリックを使ったものです。」「時間差？」

「そう、時間差です。この場に居なくても【長谷川】さんを殺害する事は可能なんです。」

「な、何だと？」オッサンが口をパクパクさせながら、大声を上げた。

俺は無視して、話を先に進めた。

「まず、そのトリックに必要な物は大きい氷と、エアコンだ。その2つを使えば、この場に居なくても犯行は可能です。」

「そのトリックは何だ？」

「簡単な事だよ。まず、【長谷川】さんをクロロホルムか何らかの薬品を使って眠らせ、ワッカを作つてあるロープを首に巻き付ける。その後で、予め用意してあつた氷を【長谷川】さんの足元に置き、立たせた。そして暖房のスイッチを入れ、タイマーをセットした。「それがどんなトリックだつてんだ？」

「まだ解りませんか？暖房がついているという事は、早く氷を溶かせる為……」

「！？」

「解つたみたいですね。そう、氷が溶ければ【長谷川】さんの首は徐々にロープに食い込む。そうして、【長谷川】さんを殺害したんです。」

「成る程……ちょっと待て、じゃあ密室はどうなんだ？一番苦労してたじやないか」

「密室か……確かに、一見不可能に見えたが実はそうじやない。犯人は、密室を造り出す必要は、無かつたんですよ。」

「へ？ そうなの……」藤咲も声を上げた。

「ああ、そうだ。だつて鍵は、犯人が持つてるんだから」

「何、だと？ ジヤあ合鍵でも作つて……」その言葉を、藤森が遮つた。「合鍵を作る必要なんて無いんですよ。」そして、一呼吸つき、犯人の名前を口にした。

「そう、この事件の犯人は……このマンショニンの管理人である貴方です。【杉山】さん」周りに居る皆がざわついた。

「犯人は、管理人なのか……しかし」その先の言葉を遮つて、俺は話した。

「確かに他の2人にはアリバイが無く、管理人にはアリバイがある。だが、さっきも説明したように、あのトリックを使えばアリバイがあつたとしても、犯行は可能なんですよ。」

そこで管理人が、重い口を開いた。「何故私が犯人だと？ 確かに、君が言うようにさっきのトリックを使えばアリバイがあつたとして

も、こここの住人を殺せるかもしれない。だが、そんな事を言つんだ

つたら、アリバイの無い彼らにも出来るんじやないのかな？」

「確かに彼らにも、あのトリックを使えば犯行は可能だ。しかし、

1つだけ彼らには出来ない事があるんですよ。」

「出来ない事？」オッサンが、言つた。

「ああ、それは・・・この部屋を密室にするという事だよ。さつき調べたが、この部屋の鍵は、タンスの一番上の引き出しに入つていた。扉には、何も仕掛けた痕は無い。だとすると、残る方法はただ1つ・・・。貴方が持っているこここの鍵を使って、ドアの鍵を締めた。それしかありませんからね」

そう言い終わつた瞬間、管理人は崩れ落ちてしまつた。そして泣きながら、こう述べた。

「許せなかつたんだ。アイツは、私の娘を階段から突き落として、殺したんだ。奴を、酔わせて聞いてみたら、全部白状したよ。」そう言つて俯いた。

「だつたら何故、警察に行かなかつた？」

「・・・自分の手で、娘の仇を打ちたかつたんだ・・・」

「死んでいい人間なんて、この世には居ないんですよ。例え、それがどんな人間であつても・・・」そして、管理人は警官と共に、その場を去つた。現場には、沈黙が流れる。その沈黙を断ち切るかのようにして、袴田が口を開いた。

「しかし、どうして密室の謎が解つた？」

「あんなの、密室でもなんでもない。ただ、トリックをセットした後に、自分が持つっていた鍵を使って締めただけの事だろ」

「じゃあ、お前が現場をうろついていたのは？」

「この部屋の鍵を探す為・・・鍵の位置で事件の犯人やトリックが異なつてくるからな」

「全く、大した奴だよ。お前は」そう言つて、オッサンは俺の背中を叩いた。俺は、むせかえつた。かくして、このトリックを使った事件を見事解決させた訳だが・・・もう一生事件に関わりたくはないと思う真治だった。だがこの先も、事件に関わっていく事に真治

は、まだ知るよしもなかつた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6104e/>

迷宮のストラテジー 2

2010年10月12日00時22分発行